

岡山県にも発生したモモのいぼ皮病

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	畑本, 求
巻/号	28巻11号
掲載ページ	p. 504-505
発行年月	1973年11月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



研 究 通 報

岡山県にも発生したモモのいぼ皮病

畑 本 求

1 はじめに

本病は、1970年に我孫子*・北島**の両氏によってモモのいぼ皮病と命名発表されたものであるが、かなり以前からわが国に発生していたものと思われる。しかし、被害が目立つようになったのは7～8年前からである。そして、現在では全国各地のモモ産地において被害が増加している傾向がみられる。

本県においても、1967年の我孫子氏の調査に筆者らが協力した際、一部の地区で発生を確認していたが、ここ、1～2年各地でかなりの発生と被害があることが判明した。そこで、我孫子氏らの報告に基づいて本病の発生生態や防除薬剤などの概要を述べるとともに、本県における発生状況などについて述べ、本病防除の参考に供したい。

2 病 徴

本病は枝幹に発生する。新梢では、秋にその基部に直径3mm前後のいぼを多数形成する。旧年枝（1年生以上の枝）および幹では、いぼといぼが連生あるいは重なり合い、枝の表面は光沢がなく粗ざうになり、いわゆる粗皮症状になる。そして、5～6月以降になると粗皮症状の部分から樹脂を分泌して、樹脂病のように見える。



第1図 亜主枝に発病したいぼ
1：2年生部位で未発病。
2：3年生部位で発病し、樹脂を分泌している。

また、枝の基部で激しく発病した場合は、そこから先端は夏季に落葉、枯死することもある(第1～3図)。古いいぼの表面には黒色小粒点（柄子殻まれのう殻）がみられる。いぼの発生部位は、1本の樹のうちでも比較的下部の枝に多くみられる。なお、新梢の

発病（いぼの形成）でも結果枝よりも徒長枝の方が早くひどく発病する。

なお、このように枝にいぼを生ずる病害にはナシ輪紋病、リンゴいぼ皮病があり、種を同じくする類縁の菌による病害である。

3 発生状況

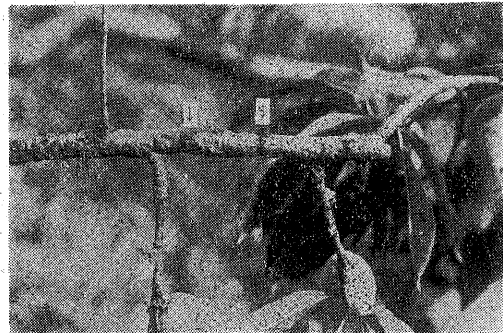
1) 発生分布 詳細な調査結果ではないが、現在までのところ発生が認められているのは山梨、福島、群馬、静岡、神奈川および岡山の各県である。本県では岡山市津高、同一宮地区、浅口郡鴨方町をはじめいずれの産地でも多少の差こそあれ発生が認められている。

したがって、今後の調査では発生地域はさらに多くなるものと思われる。

2) 品種、樹齢と発病 他の病害と同じように、本病も品種によって発病程度に差がみられる(第1表)。なお本県における栽培品種（砂子早生、大和早生、白鳳、大



第2図 発病が激しく、落葉し、枯死寸前



第3図 枝の表面は粗皮症状となり、樹脂を分泌している。

* 前農林省園芸試験技官，現農林省野菜試験技官

** 前農林省園芸試験場環境部長，現農林省果樹試験場環境部長

第1表 品種と発病との関係(我孫子)

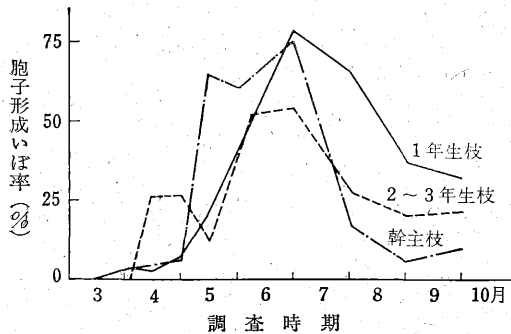
発病程度	品 種 名
多	清見, 伝十郎, 離核, 金露, 晩5号, C-1-9
中	中山金桃, 万力, 金水, 昭和, 初香味, 神奈川早生水密, 高倉, 興津, 白桃, 吉桑早生, 白鳳, 岡山500, 缶桃2号, C-1-35, C-1-45
少	砂子早生, 布目早生, 倉方早生, 大和白桃, 箕島白桃, 藤波早生, 大和早生, 中津白桃, 神玉, 大久保馬場白桃, 甘天津, 田中, 天神, 山下, 土用, は-2, C-1-32, C-5-36

久保, 大和白桃, 清水白桃, 白桃) および樹齢と発病との関係について現地調査の結果では判然とした傾向はみられなかった。

4 発生生態

1) 病原菌 *Physalospora persicae* Abiko et Kitajima という子のう菌類の一種である。

2) 病原菌の形態 柄子殻と子のう殻を形成し、それぞれ柄胞子、子のう胞子をつくる。罹病枝上のごく普通にみられるのは柄子殻、柄胞子であるので、これについてみると、柄子殻は通常孤生、まれに数個群生し、球形～偏球形、褐～黒褐色、直径244～585 μ で、初め樹皮組織内に埋もれているが、成熟するとその頂部が周皮を破り開口する。柄胞子は無色、単胞、だ円形～紡錘形、大きさ20.0～35.0 \times 5.0～12.5 μ である。



第4図 孢子飛散の時的推移(我孫子)

3) 寄主範囲 モモ樹だけに寄生し、他の果樹類には寄生、発病しない。

4) 病原菌の飛散と枝の感染時期 病原菌(柄胞子)は、もっぱら降雨で飛散し、風のみでは飛散しない。飛散は4月から10月ごろまで長期間にわたっているが、とくに梅雨期に当たる5月から7月中旬にかけて最も多く飛散している(第4図)。このことから、枝(新梢)への感染時期は4月から8月までで、胞子の飛散量の多い梅雨期が主要感染時期となる。そのため、枝の発病はこの時期に感染したものほど激しい。

枝に感染してから発病するまでの時期、いわゆる潜伏

期間は他の病害に比較してきわめて長く、普通5～6か月で、10～12か月におよぶ場合もある。

なお、徒長枝は潜伏期間が短かく、発病程度はやや激しい傾向がみられる。

5 防除法

本病に対する防除対策はまだ検討中であるが、ナシ輪紋病の防除試験やモモいば皮病の薬剤スクリーニングなどの結果からみて、当面の対策としては次のように行なうのがよいと考えられる。

(1) 無病苗木を定植する。台木、穂木などで伝染するので、購入の際十分注意する。

(2) 自家苗木を育成する場合、発病園からの穂木採取およびモモ園での育成は避ける。

(3) 発病園で補植、改植する場合はできるだけ耐病性品種を植える。

(4) 発病の激しい枝幹は、せん定時にできるだけ切り取り、土中に埋没するか、焼却する。このことは、第4図に示したように罹病樹の枝齢(1,2～3年生枝、それ以上の枝)と胞子飛散量には顕著な差が認められず、発生園においては伝染源の除去が大切であることはいまでもない。

(5) 肥培管理に注意して、樹勢を旺盛に生育させる。樹勢の弱い場合には発病が助長される傾向がみられる。

(6) ダイホルタン剤、キャプタン剤、ベノミル剤などの800～1,000倍液を5月から7月まで約10日おきに計8～9回くらい散布する。前述のように、本病の発生は降雨と密接な関係があり、主要感染時期が梅雨期であることから、この時期の散布がとくに必要で、天候や発病程度によって散布回数を増減する。散布に際しては、枝幹に薬液が十分に付着するように注意しながら散布する。

6 おわりに

本病は現在までほとんど注目されていなかった病害であるが、本県でも昨年から今年にかけて、かなりの発生と被害のあることがわかった。本病の発生が増加している原因としては、罹病樹からの穂木採取による苗木伝染に留意していなかったこと、樹の老弱化などが考えられている。

本病の生態については我孫子氏らによって解明されたが防除対策については未解決の点が多く残されている。薬剤による防除法として薬剤の種類、濃度などについて検討中であるが、いずれにしても本病だけを対象とした防除だけでなく、モモの主要病害との同時防除、さらに散布方法、散布時期などについて早急に検討しなければならぬと考える。(岡山県農業試験場)